

**2011年度
百科全書研究会成果報告会**

2011年12月3日（土）・4日（日）

於 慶應義塾大学三田キャンパス

プログラム

第一日（2011年12月3日 土曜日）

会場：慶應義塾大学三田キャンパス 南校舎5階451教室

10:40-11:00 鷺見洋一（中部大学）

趣旨説明

11:00-11:30 長谷川蔵人（東京大学仏文科博士課程）

ディドロ『ラモーの甥』と項目「百科全書」の「風景」の比喻について
（司会：田口卓臣）

11:30-12:00 白川理恵（上智大学大学院博士後期課程）

『百科全書』と『音楽辞典』に見るルソーの音楽
（司会：馬場朗）

昼食休憩

13:30-14:00 小嶋竜寿（慶應義塾大学）

プリズムの一片（『百科全書』と『商業総合事典』を巡る一考察）
（司会：小関武史）

14:00-14:30 井上櫻子（慶應義塾大学文学部）

ルーシェ『一年の十二ヶ月』とドリール『自然の三つの領域』における動物の描写と博物学
（司会：大橋完太郎）

14:30-15:00 川村文重（甲南大学非常勤講師）

ルエルの化学—機械論的物理学と『百科全書』の化学との間
（司会：隠岐さや香）

コーヒーブレイク

15:30-16:00 大橋完太郎（神戸女学院大学）

『百科全書』項目「動物」読解：動物と怪物からみるディドロとビュフォンの差異
（司会：隠岐さや香）

16:00-16:30 橋本周子（京都大学大学院人間・環境学博士後期課程）

美食の快樂の共有—グリモとその友人たちの交流を通して
（司会：真部清孝）

16:30-17:00 寺田元一（名古屋市立大学）

パリ科学アカデミー『歴史と報告』から『百科全書』へのテキスト変容—
チェンバーズを介して—
（司会：小嶋竜寿）

17:30-20:00 懇親会

第二日（2011年12月4日 日曜日）

会場：慶應義塾大学三田キャンパス 大学院校舎4階 348教室

- 9:30-10:00 淵田仁（一橋大学社会学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員）
啓蒙期の化学をめぐるフィロゾーフたち
（司会：井田尚）
- 10:00-10:30 折方のぞみ（明治大学）
ルソーの人間形成論における人為的自然のパラドクス：「本能」と「習慣」
の狭間で
（司会：井柳美紀）
- 10:40-11:20 座談会：貴重書デジタル化：過去・現在・未来
入江伸（慶應義塾大学図書館）
村松桂（慶應義塾大学図書館）
鷲見洋一（中部大学）
- 11:20-11:40 小関武史（一橋大学）
まとめ
- 11:40-12:00 小関武史（一橋大学）
事務連絡

論文誌上参加

井柳美紀（静岡大学人文学部法学科）

（仮題）『百科全書』派の政治思想——ルソーとディドロの対立を通して

小関武史（一橋大学）

『百科全書』地理項目の典拠を求めて——第1巻所収ディドロ執筆項目の場合

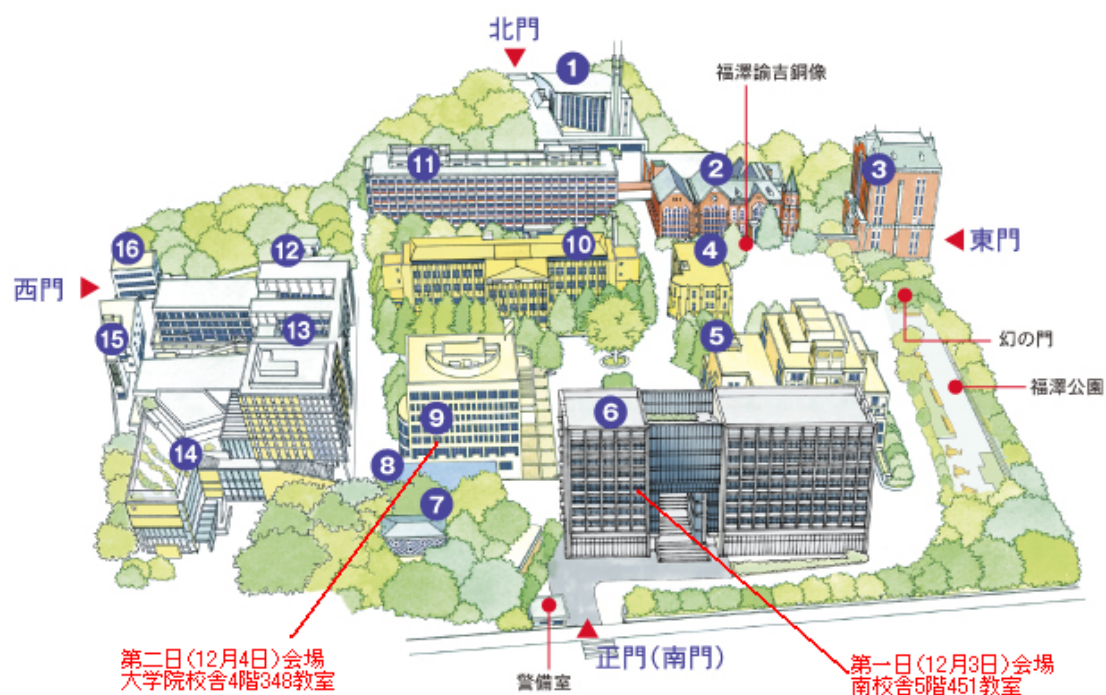
斎藤山人（東京大学・パリ第7大学 博士課程）

ジャン=ジャック・ルソーにおける都市の輪郭と思想的逆説

逸見龍生（新潟大学）

『百科全書』の言説戦略——権威と証言

キャンパスマップ



【1】北館: 大会議室、ホール、ファカルティクラブ	【2】図書館旧館: 大会議室、小会議室	【3】東館: ホール、G-SEC Lab
【4】塾監局	【5】図書館	【6】南校舎: 411-477、ホール、ザ・カフェテリア
【7】三田演説館	【8】仮設事務棟(2011年6月撤去済)	【9】大学院校舎: 311-375C
【10】第1校舎: 101-147、外国語学校	【11】研究室棟: 会議室	【12】労働組合本部
【13】西校舎: 501-545、ホール、山食、学生食堂(生協)	【14】南館: 2B11-2B42	【15】生協購買部
【16】西館		

ディドロ『ラモーの甥』と項目「百科全書」の「風景」の比喻について

長谷川蔵人（東京大学仏文科博士課程）

ディドロの『ラモーの甥』では、あらゆる音楽をパントマイムで表現するラモーの甥を見る哲学者の「私」が、それを「風景」に喩えている。かつ同様に、『百科全書』のディドロが書いた項目「百科全書」でも、ディドロは『百科全書』を「風景」に喩えている。これはなぜだろうか。「パントマイム」と『百科全書』という全く異なるように見える両者の間にどのような関連があるのだろうか。

『百科全書』の指導原理としての「分類」や「定義」や「参照」といった考え方と、文学作品である『ラモーの甥』との結節点を探る。そのためには、物の見方、あるいは対象の捉え方、時間と空間などをディドロがどのように描いているかを論じることは無駄ではないであろう。これらを論じるにあたって、『百科全書』の思想的側面というよりも、「文学的」といえる部分と『ラモーの甥』との連関を「風景」の比喻から探り、さかのぼって両者の間にある同質性を明らかにしたい。

すでに『百科全書』から『ラモーの甥』への連続性は、描写の観点からジャック・プルーストが論じている。本発表では異なった観点から両者の関連を探る。

まず「風景」の比喻が拠って立つところのもとをたどって行って、そこに見出される「見た目」(apparence)、「差異」(différence)、「ニュアンス」(nuance)などのディドロが使用する諸概念を分析する。これらの諸概念がディドロにとってどのような意味を持っていたかを考えると、次のような仮定をたてることができる。まず、自然の諸事象に内在する差異、ニュアンスを観察し、それを発見し、記述し、模倣するという過程がある。そしてさらに出来上がった作品としての『百科全書』なり「パントマイム」というものがある。さらにそれを読む読者、あるいは鑑賞者である哲学者「私」がいる。この間に類比的な関係を見出すことができるのではないか。つまり、ラモーの甥の「パントマイム」とそれを見る哲学者の「私」という関係と、『百科全書』とその「読者」という関係の間には、「風景」を眺めるような者としての類比的な関係が成り立つのではないだろうか、という仮定である。以上のような観点から論じていく。

『百科全書』と『音楽辞典』におけるルソーのオペラ論について

白川理恵（上智大学大学院博士後期課程）

ルソー（1712-1778）が『百科全書』の音楽に関する項目の執筆をディドロから依頼されたのは、1748年末または1749年。それからわずか3か月のあいだに全項目数385項目のうち少なからぬ項目を書き上げたことは自伝『告白』に鮮明に描かれている。しかしながら、ルソーが執筆した数々の項目はラモー（1683-1764）による攻撃の対象となり、二人のいざこざから編集者ダランベールによってルソーの承諾なしに書き換えや部分的な削除が行われる。やがてルソーは『百科全書』に寄稿した数々の項目に手を加え、みずからの考えが完全に反映されるよう自身の手による辞典を編纂しようと思いつき、1767年『音楽辞典』として出版する。当然『百科全書』と『音楽辞典』には同じ項目名での同じ記述が多数認められるが少なからぬ異同もあり、それらは1)『百科全書』において他者によって書き換えられたもの、2)『音楽辞典』においてルソー自身の思想の発展によって書き直されたもの、3)『音楽辞典』において純粋に増やされた項目、の3種に分けることができよう。

『百科全書』から『音楽辞典』までのおよそ20年の間に、ルソーは『村の占い師』（1752）で詩と音楽を手掛ける音楽家として才能を開花させ、『新エロイーズ』（1761）では各所に音楽や音楽劇に関する論議を盛り込み、さらにいくつかの書簡では文体に音楽的なテクニックや効果を盛り込みまるで音楽劇として再現しているかのような見せ場を作る。それらはいずれも音楽の持つ直接的に心を揺さぶる働きを小説技法に転用したもののように思われる。

本発表では、『百科全書』や『音楽辞典』の項目に見られる音楽理論がどのように、『村の占い師』や『新エロイーズ』などの文芸上の作品に反映され、適用されていくのかを見ていきたい。音楽や音楽劇に関する理論が、小説技法にいかに応用されているのかについての研究はまだほとんど進んでおらず、この20年ほどで大きく発展してきた音楽理論の研究の一隅に一石を投じることができるだろう。またルソー自身の理論の変化・変遷を見極めることで、上記2)を整理することができ、結果として1)の『百科全書』における項目執筆の際の他者の手による意図的な書き換えや削除について考えるきっかけができるのではないだろうか。

プリズムの一片（『百科全書』と『商業総合事典』を巡る一考察）

小嶋竜寿（慶應義塾大学）

『百科全書』に対して様々なアプローチが試みられるなか、関連文献との比較研究が本格的に持ち込まれたのは、ジャック・プルーストによる『ディドロと百科全書』においてであった。以降、『百科全書』と先行文献あるいは後続文献との照合が連綿と行われるようになる。そして、これまでに蓄積された知見も数多い。ディドロの思想形成に及ぼした影響や、汎ヨーロッパ規模に亘る同時代の様々な事典類の発掘など、枚挙にいとまがない程である。さらに、18世紀における知の伝播および変容解明への展開も期待できる研究手法の一つとして注目されるまでに成長しているといっても過言ではないだろう。

とはいえ、従来の比較方法がすでに完成しているわけではない。概して、調査はディドロの執筆項目を中心に進められてきた。たしかに、編集者としてのディドロの存在は看過できない。また、項目執筆者の同定がディドロを中心に進められてきたという状況も事態の進行に拍車をかけている。事実、豊かな成果も上げており、研究の重要性はいうまでもない。しかしこれでは、『百科全書』をディドロ個人の作品へと還元してしまうことになりはしまいか。それは、『百科全書』とは、ディドロ個人の著作ではなく、複数の項目執筆者が参加する作品であるという、事実の見落としを意味するようにも思われる。今一度、多様な執筆者間の、あるいは先行・後続文献と『百科全書』間の、それぞれがつねに主客の転位を繰り返しながら生成する、思考のプリズムに目を向ける必要があるのではないだろうか。また、プリズムのまにまに浮かび上がる姿態にこそ、18世紀メディア産業の産物である、『百科全書』の特性が潜む可能性を認めることができるのではないだろうか。

今回の発表では、上述の問題意識を、商業関連項目をはじめとして『百科全書』で広範に利用されていた、サヴァリの『商業総合事典』との比較を通じて展開する。基本的には、両事典間に記載された項目の記述の異同を確認する、従来の典拠調査を踏襲するだろう。しかし今回はさらに、『百科全書』がサヴァリの事典のいかなる項目を採用しなかったのか、という問題にも言及する予定である。事典間の比較において、項目の不採用もまた、プリズムの一端を形成し、何らかのメッセージを生み出しているのではないかと思われるからである。項目の不在という観点から、『百科全書』における項目生成の逆照射を試みたい。

ルーシェ『一年の十二ヶ月』とドリール『自然の三つの領域』における動物の描写と博物学

井上 櫻子（慶應義塾大学文学部）

素朴な田園生活の美德を謳うことを目的とした18世紀特有のジャンル、描写詩は、自然の中に生きる人間の自由な心の動きを平易な表現で描きとっている点において、これまでロマン主義時代の抒情詩の再生との関連で純粋に文学的観点から論じられることが多かった。このジャンルは、イギリスの詩人トムソンの『四季』が紹介されたことをうけて、18世紀後半のフランスで急速に発達したものとされているが、フランスで発達した描写詩と呼ばれる作品群と、トムソンの『四季』とを比較してみると、フランスの詩人とイギリスの詩人が目指すところがはっきりと異なっていることが分かる。そしてそのような相違は、こうした作品が生み出された文学的・思想的土壌の相違を反映していると考えられるのである。トムソンは、『四季』を純然たる教訓詩として世に送ることをめざした。従って、彼は自然の歌の制作をとおして、自然の中に身を置く人間が、自然の観想を通して神の観想に至り、宗教的、道徳的感情に目覚める過程をたどろうとした。これに対して、描写詩というジャンルの確立者であるサン＝ランベールをはじめとして、18世紀後半のフランスで活躍した詩人たちは、むしろ当時のフランス文学界、思想界での関心事を自然の歌に織り込もうとしたと言える。たとえば、サン＝ランベールの『四季』に、ディドロの感覚論的人間論の影響が見受けられるのは、その典型的な事例であると考えられる。本発表では、描写詩の代表的著作ジャン＝アントワヌ・ルーシェ『一年の十二カ月』（1779）とジャック・ドリール『自然の三つの領域』（1808）を取り上げ、その作品に見られる動物の描写が、ビュフォンの『一般と個別の博物誌』に展開されるさまざまな動物の生態に関する解説をふまえたものであることを示したい。このような作業をとおして、哲学者だけではなく、詩人もまた文学創造をとおして百科全書的知にいたろうとしていたことを明らかにしたいと思う。

ルエルの化学—機械論的物理学と『百科全書』の化学との間

川村文重（甲南大学非常勤講師）

近年、18世紀フランスにおける、ラヴォワジェ以前の化学を再評価する積極的な動きが、化学史・科学哲学史研究で見られるようになってきた。その代表的成果として、パリ第十(ナンテール)大学が刊行した哲学研究雑誌『コルピュス (*Corpus*)』第56号(2009年)「化学と『百科全書』」特集を挙げることができる。この論文集は、従来の化学史を支配してきた発展史観から距離を置き、『百科全書』の化学関係の項目を手掛かりにして、1750年代の化学の実態を明らかにしようと試みている。しかし、どの論考も、なぜ『百科全書』の化学図版集の最後を飾るのが、リバヴィウス『アルキミア』(1597)から転載された錬金術のシンボル画なのか、そもそも『百科全書』の化学において、錬金術がどのような位置づけにあったのかという疑問について答えてはくれない。18世紀化学が、物理学から自立した一学問として社会的承認を受けるようになった経緯を強調するあまり、錬金術と化学の関係性が重要論点として浮上してこないのだ。このような錬金術のテーマの欠落は、化学史研究が錬金術と化学を断絶させる発展史観に依然として支配されていることを、暗に示しているのではないだろうか。

18世紀における物理学と化学の対抗関係と、錬金術と化学のつながりと、さらに『百科全書』の化学を通観するには、『百科全書』第三巻以降の化学関係の項目を主に執筆したヴネル(1723-1775)の師ルエル(1703-1770)の化学を取り上げるのが適当である。王立植物園で開かれたルエルの化学講義には、ヴネルだけでなく、ディドロやルソーなどの啓蒙思想家、モンペリエ学派の医学理論家ボルドゥ、のちに近代化学革命の父と評されるラヴォワジェらが受講し、その化学理論や方法論が当時の科学・哲学思想に多大な影響を与えた。本発表では、ルエルの化学の独自性をめぐって、ルエルの講義録と『百科全書』の化学に関する項目を参照しながら、以下の問いに答える形で18世紀化学史のエスキスを描いてみたい。ルエルが機械論的物理学に対して、どのような偶像破壊運動を展開したのか。ルエルが独自に理論化した、「ラトゥス (*latus*)」という化学変化の仲介作用は、当時主流となりつつあった親和力理論とどの点で異なっているのか。そしてヴネルは、ルエルの化学とどの点で袂を分かったのか。最後の問いについては、ルエルの錬金術に対する共感が、換言すれば、ある種の実証主義傾向に対するルエル独自の姿勢が、考察の射程となる。

『百科全書』項目「動物」読解：動物と怪物からみるディドロとビュフォンの差異

大橋完太郎（神戸女学院大学）

西洋哲学および思想において、存在するものを秩序づけ措定してきた考え方として、形態に基づく諸存在の配列という行為があげられる。諸存在の實在の自然的（形而下的）様態にもとづいて世界に存在する事物を関連させるこのやり方は、いわゆる形而上学的な存在論と並行して、西洋世界における存在物の秩序の論理として機能し続け、今日の生物学の礎となっている。こうした存在論は、形態の類似に基づくアリストテレスの生物分類および発生論に端を発する。やがてアリストテレス的類種の規定はプリニウスの博物学的知見と混合しつつ、生物学的分類概念のもととなる類と種に基づいた階層秩序が構想されていく。これは同時に生物学と博物学との混淆をも予期していた。種・類における形態的相同性が動物の形相的な規範となる一方で、怪物＝奇形 *monstre* とは、種間、あるいは個体間において見出される特定不可能な存在と見なされ、類種構造を脅かしつつ、新しい種の存在可能性を示す両義的な存在として考えられてきていた。

今回は、上記の視点を基本的に保持しながらも異なる帰結を導きだした二人の十八世紀哲学者の思想、すなわち個体的差異を重視したディドロの哲学と、発生における構造的類似性を重視したビュフォンの生物哲学との差異を、『百科全書』における項目「動物」を中心に考えてみたいと思う。その際、最終的にディドロがこの項目を起草するにあたって、ビュフォンの考えをどのような仕方で変奏したのかという点を、テキストに具体的に則した形で考えてみたい。

美食の快樂の共有—グリモとその友人たちの交流を通して

橋本周子（京都大学大学院人間・環境学博士後期課程）

本発表では、美食を中心として結ばれたグリモ・ド・ラ・レニエール Grimod de la Reynière (1758-1837) とその友人たちの交流が、〈食の快樂の共有〉という視点からどのように考察されうるかを問う。この〈共有〉は以下の二段階によって構成される。

革命以前から、グリモはひとえに美食を目的とした集會を友人たちと規則的に開催した。こうした集會は革命の後にも継続し、主著『美食家年鑑 *Almanach des Gourmands*』(1803-1812)の出版の成功とともにグリモにおけるその存在意義は高まる。『年鑑』中で展開される美食批評の正当性を保証することを義務とした「食審委員会」は、そうした集會の中でも〈共有〉のための手段を極端な形で表現しているものであるといえよう。「委員会」を構成する委員たちは一定の共通した味覚を有していることが求められ、また実際に味見するその行為においても、いかにして居合わせた会食者たちが対象となる料理の味わいを共有するかについて様々な工夫が施されている。このようにして、第一段階目の〈共有〉—個人的な経験の「食べる快樂」を複数の仲間と共有する—がひとまず達成される。

しかしながらこの種の集まり自体は、そこまで独創的であるとは言えない。〈共有〉という観点から見たとき独創性はむしろ、グリモが美食の活動に際して持ったもう一つの集まり「カヴォー・モデルヌ *Caveau Moderne*」の場合に顕著である。すなわちこの集まりは独自の機関紙『美女と美食家新聞 *Journal des Gourmands et des belles*』(1806-1815)を持ち、本来その場での即興的な楽しみでしかないはずの、食卓の周囲に展開される雰囲気をもそのまま文章に書き出したのである。こうして、第二段階目の〈共有〉—複数の仲間どうしからなる内輪での「食べる楽しみ」が、出版物を通して不特定多数の読者と共有される—が可能となったのである。

一方で、食の快樂の舞台となるべき食卓は乱痴気騒ぎの場、あるいは虚栄心のせめぎ合いの場と墮す可能性とも隣り合わせであるのも事実である。グリモは食の快樂の〈共有〉の達成にはかなり厳格な規則を会食者全員が実践している必要があると考えていた。そのため彼はときに厳格過ぎると思われるような諸規則の遵守を「美食家」である読者たちに求める。したがって彼においていわゆる食卓作法は、単に育ちの良さを示す指標であるのみならず、食の快樂の共有を可能にする前提として意義を持つものであったといえる。

パリ科学アカデミー『歴史と報告』から『百科全書』へのテキスト変容-チェンバーズを介して-

寺田元一（名古屋市立大学）

最近『百科全書』の典拠としてのチェンバーズ『サイクロपीディア』研究がにわかに盛んになったが、マーティンとチェンバーズ共訳の『1699～1720年までのパリ科学アカデミー歴史と報告』については未開拓。その特徴と意義を紹介する。この『歴史と報告』英訳はおよそ2200ページからなり、そのうち700ページ（1/3）ほど、全79項目がチェンバーズによって訳されている。主として磁針の変移と水力学など自然科学関係や自然誌関係の遺訳（1740年没）を主訳者であるマーティンが利用。チェンバーズの訳は時期的には1701年から1719年の歴史と報告にわたる。

1728年に『サイクロपीディア』初版が出版されており、初版から後続版にかけて小さな改変は多数あるが、大きな増補改訂はなされていない。チェンバーズが1720年頃までの『歴史と報告』を『サイクロपीディア』諸版で借用し、その『サイクロपीディア』の某版の仏訳を元に『百科全書』の多くの項目は書かれた。

これらは研究者に既知の事実だが、今回『サイクロपीディア』を執筆するために利用したと推定される『歴史と報告』の英訳が「発見」された。従来は『サイクロपीディア』から『百科全書』へが問題にされたが、新たに『歴史と報告』仏語原版→『歴史と報告』英訳→『サイクロपीディア』→『サイクロपीディア』仏訳→『百科全書』という、二重翻訳による迂回過程で、テキストが複雑にコピーや再編・超克されたことが、問題として浮上した。

結論的には、1. チェンバーズが科学アカデミー『歴史と報告』を自ら英訳し、それらを『サイクロपीディア』執筆に一部活用したこと、2. 執筆に当たっては英訳をそのままコピーするのではなく、『サイクロपीディア』「前書き」に書かれた執筆方針にしたがって、自らの英訳の順序を入れ替えて定義を先に記述したり、最新の知見を加えたり、一般向けに表現を平易にしたりするなど、適切な書き換えしたこと、3. 『歴史と報告』英訳と『サイクロपीディア』の本文の間に、単純に前者から後者へという方向では説明困難な微妙な違いが無数にあることなどを示したい。

啓蒙期の化学をめぐるフィロゾーフたち

淵田仁（一橋大学社会学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員）

近年、18世紀フランスの化学 chimie に関する研究が盛んに行われるようになってきた。それらの研究の大きなテーゼの一つとして、化学史の書き換えを挙げることができるだろう。すなわち、これまでの科学史、化学史研究ではラヴォワジエを化学におけるパラダイム転換点としてみなし、それ以前の化学を前学問的なものとして重要視してこなかった。そのような歴史認識として、例えばバシュラールの研究（『火の精神分析』）を挙げることができるだろう。

だが、ラヴォワジエ以前に書かれた『百科全書』を見ると事情は大きく異なる。『百科全書』において、化学の項目を執筆したのはガブリエル＝フランソワ・ヴネル(Gabriel-François Venel 1723-1775)であるが、彼の執筆した化学に関する項目を見ると、化学が一つのディシプリンを形成していたことが読み取れる。このラヴォワジエ以前の化学の自律性は、Christine Lehman、François Pépin らの研究（2009年）によって近年明らかになった。

また、化学に取り組んでいたのは、ヴネルだけではない。ディドロ、ドルバック、そしてルソーといった「フィロゾーフ」たちは皆、化学の研究に熱中していた。例えば、ルソーは『学問芸術論』以前の1747年に『化学教程』を執筆していた。この作品は草稿の形でしか残っておらず、出版されることはなかったが、ルソーの草稿を見る限り、出版を望んでいたことが伺える。ディドロもヴネルの先生であるルエル(Guillaume-François Rouelle 1703-1770)の講義録を残している。

しかしながら、フィロゾーフたちは、化学が当時最先端の学問だったからという理由だけで化学を学んでいたのではない。彼らが化学に求めていたものは、自らの哲学、政治理論の「基礎付け」であった。力学、機械学だけでは解決することができない運動の原因といった哲学的問題や、学問における適切な「方法論（実験、観察）」を彼らは化学に求めていた。

本発表では、当時の化学理論そのものではなく、上記のようなフィロゾーフと化学の関係性について考えてみたい。ルエル、ヴネルといった化学者に近かったフィロゾーフたちが、何を自らの取り込み、何を取り込まなかったのか。このような複数の知の接触を明らかにすることが本報告の目標である。

ルソーの人間形成論における人為的自然のパラドクス：「本能」と「習慣」の狭間で

折方のぞみ（明治大学）

本発表では、ルソーの人間形成論における自然と人為の関係を、「本能」や「習慣」といった概念との関わりに着目して分析する。『百科全書』の項目「本能 *instinct*」を見ると、人間と動物を隔てる基準から自然と人為の境界線についてまで広く考察がなされている。また、動物においても習慣が「第二の自然」となることが指摘され、暗に「本能」という概念自体の危うさを主張するような記述も見受けられる。翻って項目「習慣 *habitude*」に目を転ずると、「習慣が自然（＝本性）を教育し、それを変化させる」という興味深い一節を読むことが出来る。

ルソーの『人間不平等起源論』（1755）の中でも、「自然人」から「社会的人間」への不可逆的な移行過程において、本能のみに生きる段階ののちに反復行動が習慣化し、「第二の自然（＝本性）」として内面化される過程が描き出されている。よく知られているように、「自然」という言葉はキリスト教的な文脈においては惨めさの象徴でもあった。他方、野生的で飼いならされていない自然は、人間本性においては社会的段階以前のものとして、理性によって統治すべきだとされるのが常であった。そうした中でルソーが「失われた自然」に対して肯定的な見方を提示し、逆に人為への警戒心を表明したことは、当時支配的であった進歩至上主義的な思想に一石を投じるものである。だがルソーは人為を全面的に排除しようとしたわけではない。例えば『エミール』（1762）では、教育という営為において、自然の意図に従った適切な人為の介入は必要不可欠であるという考えが示されている。そして、「社会の中の自然人」という論理的には実現不可能な存在をいかにして実験的に思考しうるかといった試みが、小説とも哲学書ともつかぬ形式のこの著作においてなされるのである。

このように、ルソーの思想において人為は常に断罪されているわけではなく、人為的自然が原初の自然を目指しそれを乗り越えるプロセスとして、教育に付された重要性も極めて大きい。まったき自然状態にいる原初的自然人の段階から抜け出たのち、人間は自らをどのように変革しようとしてきたのだろうか。こうした視点から、ルソーの人間形成論において人為的自然が「本能」と「習慣」の狭間で両義的な様相をみせつつ果たしている役割を確認したい。

『百科全書』派の政治思想—ルソーとディドロの対立を通して

井柳美紀（静岡大学人文学部法学科）

ジャック・ブルーストは、ディドロが『百科全書』に対して与えた影響のうち、政治的な部分を軽視するとすれば誤ることであろうと述べ、その政治に関する諸項目について詳細な分析を行った。たしかにディドロの『百科全書』における政治学は、この時代に一般的な絶対主義的なものと解されるべきものであり、むしろ彼の政治学は『百科全書』を編集して以降、現実の様々な経験、特にロシアにおけるエカテリーナ二世との対話などの経験によって鍛えられ、啓蒙専制君主批判にみられるよう新たな展開を遂げていく。一方、ルソーは、ディドロの政治に関する諸項目「自然法」を読み、『社会契約論』の草稿『ジュネーヴ草稿』を執筆するなど、両者は政治学上対立した。しかし、ディドロの晩年の政治学は、ルソーのそれに接近していったと解されることもあるが、幾つかの重要な点において、当初の考え方を受け継いでおり、その対立は政治を考える上での興味深い幾つかの論点を提起していると思われる。本稿では、特に、政治社会の基礎をなすものとしての人間の利己心、情念、理性、意思をめぐる諸議論、さらには政治の目的としての自由、幸福、正義の観念などに着目しつつ、二人の政治学上の対立とその意味を検討していくこととする。なお、主として、ディドロが『百科全書』を執筆した時代に絞って検討していく。

『百科全書』地理項目の典拠を求めて——第1巻所収ディドロ執筆項目の場合

小関武史（一橋大学）

『百科全書』において、地理は最大の項目数を誇る分野である。世界各地の地名を見出し語とする群小項目は、初期においてはディドロが編集者の立場で書いている。自分でもよく知らない地名について、ディドロはどのような経路で情報を得たのであろうか。18世紀半ばに利用可能だった文献を参照したにちがいないが、具体的にはどれだろうか。

初期段階でディドロが参照したことが確実な文献は、少なくとも四つ存在する。いずれも事典であり、大量の地名を見出し語として収録している。ディドロはそれらの項目を、ときにそのまま写し、ときに要領よくまとめている。

ディドロにとって、四つの事典の優先順位は明確である。初めのうち、ディドロはヴォジヤンの『携帯地理事典』のほぼすべての項目を写している。次に、『トレヴー事典』を用いて、ヴォジヤンが漏らした地名の穴埋めを行っている。さらに、第1巻の300ページ付近から、モレリの『歴史大事典』に頼り始める。最後に、二つの段落から構成される地名項目については、第一段落を事典ヴォジヤンに基づいて記述し、第二段落をサヴァリーの『通商事典』から引いている。このように複数の事典を自在に駆使することによって、ディドロはなるべく多くの地名目録を『百科全書』に提供しようと試みていたのである。

地名小項目は記述量が少ないため、内容を手がかりにして典拠を突き止めることが難しい。まして、ディドロは典拠に関して沈黙を守ることが多かった。したがって、調査はディドロが典拠として利用した可能性のある文献の見当をつけることから始まる。そして、その文献を一ページずつめぐりながら、『百科全書』の記述と近いものがあるかどうかを探るのである。気の遠くなるような道のりである。

しかし、私たちにとって幸運なことに、ディドロは滑稽な記述に行き当たると揶揄せずにはいられず、典拠の著者なり標題なりを書きとめてしまうのだ。その「軽率さ」のおかげで、ディドロの典拠は『百科全書』メタデータ・プロジェクトの網に見事に引っ掛かる。一度でも網に引っ掛かれば、それらの情報はリスト化される。すると、「典拠として利用した可能性のある文献の見当をつける」作業が、格段に楽になる。

本稿では、『百科全書』初期段階におけるディドロ執筆の地理項目題材に、その典拠が何であるかを明らかにしたうえで、メタデータ・プロジェクトの作業がどのような研究に役立ちうるかを示したい。

ジャン=ジャック・ルソーにおける都市の輪郭と思想的逆説

斎藤山人（東京大学・パリ第7大学 博士課程）

ジャン=ジャック・ルソーは自らの著作を社会に向けて問う際に、しばしば都市と地方という二極性を背景として用いている。リスボン大地震と最善説を巡ってヴォルテールと交わされた『摂理についての手紙』を引くまでもなく、ルソーにとって都市（特にパリやロンドンのような大都市）とは文明によっていびつに集積化された空間であり、よって当然のごとく、自然の必然性から逸脱したものであるとされる。『新エロイズ』序文や『マルゼルブへの手紙』にも描かれているように、地方から大都市への大量な人口移動が引き起こす農地の荒廃と、それに伴う風俗の墮落を憂慮する点も、いかにもこの思想家にふさわしい態度と言えるだろう。しかしながら、ルソーの思想・原理において一見、確固とした否定性を与えられる大都市は、(流行としての)モードという不安定な時間性に触れることで、曖昧な相貌を帯びてくる。宮廷や社交界の中心から発して、周縁へと放射されるモードの波は、時差を伴った模倣の遊戯を地理的な空間において展開するが、このような求心力を反転しようと試みた『新エロイズ』の小説的表象においては、理想とされるべきクララン共同体の姿が奇しくも（あるいは必然的に）大都市と双子のごとく似通っているのである。ジュリやサンプルーといった主要な登場人物の傍らに描かれて、彼らとの同化・模倣を欲望する人々の姿は、パリの社交界に生きる人々と同様、本来の存在から引き離されており、別種の形にせよ自己疎外を強いられている点では変わることがない。クララン共同体にしばしば投影されてきたルソーの人間論的・道徳的な規律性が、実は彼の批判して止まないモードの論理（模倣の法）と密かに二重写しになっていることは、この思想家における大都市というトポスの重要性を裏返しに示しているものであると言える。ヴァルター・ベンヤミンの『パッサージュ論』の片隅に引用された『孤独な散歩者』を思い起こすまでもなく、都市の内部と、その境界を越えた外部とを往還する運動は、ルソーの思想そのものに付与されるべき一つのアレゴリーの形を結実していると言えようが、このような地理空間的な偏差・移動のモチーフが、彼の哲学的な思想・原理にどのような逆説性を持ち込んでいるのかという点について、今回の論稿で明らかにしたい。

『百科全書』の言説戦略——権威と証言

逸見龍生（新潟大学）

本報告では、『百科全書』ディドロ執筆項目本文における「黙示的典拠」(références implicites)——テキスト内部では明示的には言及されていない『百科全書』項目の源泉(sources)——の解釈を通じ、『百科全書』本文の生成研究において近年しだいに注目されるようになった、その言説水準の重層性の次元を、〈声〉という主題と結びつけながら提示したい。具体的には、第13回国際18世紀学会（オーストリア、グラーツ大学、2011年7月）シンポジウム「『百科全書』典拠研究の新たな展開」において、発表者が『百科全書』の隠された源泉のひとつとして報告したロバート・ジェームズ『医学総合事典』仏訳(1745-1748)を資料として取り上げる。

同『事典』は医学のみならず生理学、解剖学、化学、薬草学、博物学など広汎な領域を覆う英語版総合事典の仏訳増補版であり、1751年『百科全書』初巻刊行以前の準備期間とほぼ重なって刊行されているだけでなく、ディドロ自身が翻訳作業の中心としてその刊行に深く関わったことにおいて特に知られる。『百科全書』典拠としての同書の役割はこれまでほとんど検討されてこなかったものの、『百科全書』の相当部分に同書のテキストがそれと明示されぬまま複雑に滑り込んでおり、その書き直しや改変のプロセスに注目することで、項目記事作成においてディドロが何を意図しようとしていたのか、その言説文脈を客観的に再構築することが可能となる。

発表ではまず、ディドロ執筆項目を同時代の他の辞書と相互に比較・検討し、ジェームズ仏訳本文の相当箇所が『百科全書』の特定の項目群にきわめて近似している事実を、若干のディドロ執筆項目を事例に示す。次に同様の方法を用いて、『百科全書』における「黙示的な典拠」として考えられうる同書の一連の項目群を提示する。

最後に、ディドロがこれらの典拠をいかにみずからの文章のなかに取り入れ、変容させていったか、自己化＝固有化(appropriation)のプロセスの概念に基づいて検証したい。その結果示されるのは、異国の植物の生態についての証言や、医学・生理学や化学上の権威による報告や実験など、制度的な知を伝える原文の記述を大胆に改編し、これに削除や追加、脱線を自由にくわえながら、絶え間なく原文を書き換え、その結果、伝承や規範に対するアイロニカルな秩序の転移の場へと元のテキストの意味そのものを変容させていく書き直し(réécriture)作業の実態である。おそらくこのような言説の実践は、それ自体がひとつの歴史的な文脈に位置づけられるべきものである。

結論として提示するのは、他者の言語に寄生し、影＝分身のようにその言説そのものの限界（その条件とその文脈、その沈黙の前提）を境界づけ、暴き出そうとする、『百科全書』にみられるポリフォニックなエクリチュールの歴史的・政治的機能である。権威の声の「一」性の無効を宣言する「多」の言語の提出——『百科全書』には、18世紀中葉の政治的・言語的危機の時代に呼応する、隠された多声性の次元が少なくともその随所に見出せうる。